
我が名はニャンコ

麻栗留音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が名はニャンコ

【ZINE】

Z6861-Y

【作者名】

麻栗留音

【あらすじ】

猫と遊びながら書いた、それだけの駄菓子。

我が名は「ヤンゴ。

太古の古より神聖なる使徒として混沌の地上に在る。我々は高貴にして自然。自然にして高貴。

群れす媚ひす染まらず、汝らの傍らに在り監視する宇宙意思
崇め祭れ、さりばけん…。

今日は良い天氣ニヤ。

お様がサンサンとあたかほこりな射しをくれる一

アタシがこの家に来てからもう一年半くらいこのめったに使わない、野菜と調味料置き場になっちゃつてゐる無駄に豪華なお客様用リビングの、無駄にアンティークなソファーの上が木漏れ日のベッド。アタシはここが一番気に入つてゐるニヤ。ここでもぐもぐのお日様浴びながら寝まくるのが、日中の日課ニヤ。

アタシには消したくても消えないトラウマがあん二ヤ。前の飼い主は、まだ産まれたてのアタシを寒空の下に捨てた二ヤ。アタシ、何をどうして良いのかわからなくて、お腹だけは減つてて、とにかく何か食べたくてトコトコトコトコトコ、冷たいアスファルトの上を歩き回つた。ずっと、ずっとニーヤ。途方も無くずっと、ずっと…。その内にアタシの上を、何か黒い、鋭い嘴の鳥が鬱陶しくまとわりつくようになつたの。そいつらはアタシの小さな、汚れ切つたゴミクズみたいな体を、少し離れた場所からいつも狙つてた。漆黒の闇みたいて底知れない塊に、いつもギラギラ妖しく光る目。アタシは後ろが怖かつた、いつもいつも後ろが怖くて、一歩歩く度に振り返つては、いつあの黒い塊がアタシに向かつて嘴を突き立てて来るのか、それが怖くて正直、気がおかしくなりそうだったニーヤ。アタシは凄

く怖い思いをしたニヤ。だから今でも誰にも体を触らせない。アタシを触つていいのは、この家で唯一アタシにカリカリビジューシーの2種類の「ご飯をくれて、アタシがご飯食べるのを傍ですつと見てくれるお母さんだけニヤ。それ以外にアタシに触れてくる者は、無駄にアンティークなソファーをズタズタにしながら毎晩手入れした、この研ぎ澄まされた爪が許さない。ニヤ。

毎日毎日、後ろから決して前に追い越さない恐怖が着いてきて、アタシは憔悴し切つて、可哀想なくらい汚れて弱つて、瘦せていたニヤ。いつもお腹減つて、何か食べれそうな物が落ちてる度にクンクンして。でもほとんど猫には食べれない物で、なんでアタシこんな惨めな身の上なのつて、悔しくて鳴きたくなつた事たくさんあつたニヤ。でも絶対鳴きたくなかった。アタシは今凄く惨めだけど、だから猫なで声でミヤオミヤオ鳴ぐのなんて、アタシのエベレストより高いプライドが絶対許さなかつた。今アタシ、毎日夜の5時半になるとお腹が空くから、この家のお母さんに猫なで声で「飯食いてー」と、ミヤオーンミヤオーンつてやつてるけど、演技。本当のアタシは絶対に鳴かないよ、それはアタシがここから居なくなるまで変わらないニヤ。

アタシはこの家の、今はもう5、6年付き合つてる彼氏の所へ同棲しに出ちやつた若い女に拾われて、恐怖と空腹の毎日から抜け出す事ができた。痛い注射とか、神社に行つて供養みたいな事されたり、色々めんどくさい事に付き合わされたりしたけど、トラウマになつちやつてる怖かつた毎日から抜け出す事ができたから、結論は良かつたつて思つてるニヤ。あの若い女がアタシを拾わなかつたらソフアーでぬくぬくも、カリカリとジューシーの美味しいご飯食べる事も、この家のおじいちゃんが松ボックリ投げるのをダッショで追い回したりもできなかつたし、仏壇破壊したり五月人形バラバラにしたり、障子切り裂いたり米ぶちまけたりの刺激的な遊びを楽しむ余

裕もなかつたニヤ。この家の男らは面白いニヤ。アタシが何かを破壊する度に「あー」だの「まいつたなあ」だの途方に暮れて、あからさまにげんなりするから面白いニヤ。でもだからってアタシをぶつたり、叩いたりしなくて、猫だからしょうがないって猫の事を理解してくれるから、尊敬もしてるニヤ。見せないけど。美濃焼きの焼酎サーバーって、この家のお父さんが大事にしてたオモチャを棚から落としてセラミックの破片にしちゃつた時なんか、お父さん悄気まくつちやつたけど、アタシの事ぶたなかつたもん。毎晩酔っ払つてアタシに馴れ馴れしく触つてきて、その度に高速パンチと手入れされた爪で手をハつ裂きにしてやつてるけど、アタシの事ぶたないから案外、嫌いじやないニヤ。ウザいけど。

天涯孤独のアタシには仲間は居ないけど、仲間に近い存在かなつて感じてるのはお母さんニヤ。お母さんだけにはアタシの中々に上質な毛を撫でさせてる。お母さんがアタシに一番優しいから、色々許して上げてる。同性だから気楽つてのもあるかなニヤ。おじいちゃんはかわいいニヤ。いつも夜になると、どつかから拾つてきた松ボツクリを廊下で投げてくれて、コロコロ転がつてくカサカサの松ボツクリに、アタシの野生が呼び醒まされて、ダッシュで追いかけちやうニヤ。猫だから、動く物追いかけちゃうのはしようがないニヤ。アタシ肉食系女子だもん。おじいちゃんはアタシが廊下でリラックスして転がつてる時とか、階段でボーッとしてる時とか、絶対声出してリアクションするからかわいいニヤ。アタシがコタツの中でぬくぬくしてる時とか、アタシの姿が見えないぞつてリアクションを声に出してしてるから解りやすくてかわいいニヤ。あと、何げにアタシのタイプだつたりする。アタシ職人気質に弱いニヤ。

アタシにとつてそんな日常の、あの辛かつた日々と比べたら本当に幸せで、温かい真心に満たされてるこの家。これ以上に何かを望んだら、アタシはきっとまた全てを失うんだろうなつて、そんな怖さはいつも心の底に渦巻いてる。見せないけど。凄く怖い思いをする

と、急に物が動いたり、急に体を触られたりするとビクッてなつちやう、悔しいけど。でもそれは猫も人間も同じだと思つてゐるニヤ。こんなに幸せな日々がアタシを包んでるのに、なんでニヤろう、窓から外を眺めちゃう。この家の窓は一重構造の頑丈なガラス、その厚いガラスの内から、あんなに怖い思いをした外の世界を、いつまでもいつまでも眺めちゃうニヤ。なんか小さい虫が飛んでたり、なんか知らない鳥がピィピィ鳴いてたり、風で木の葉がガサガサ鳴つたりすると、ガン見しながら田で追つちゃう。外の世界の色々な変化が面白くて、真剣になつちゃう。あそこに飛び付いたらどうなるのかニヤ、あれを追いかけ回したら凄く楽しそうだニヤ、そんな妄想で頭の中がいつぱいになつて、真剣に田で追つちゃう。でもアタシ、わかってる。アタシみたいな性格の猫が外の世界に出ても、きつと周りが見えなくなつて飛び出して、車に轢かれて死ぬニヤ。刺激が楽しくて、新鮮な変化が面白くて夢中になつて、絶対何かに轢かれて死ぬニヤ。この家の中でだつて、何度も尻尾踏まれたり、ダッシュして横切つた時脚とニアミスして軽く蹴つ飛ばされたりするニヤ、自分の事は自分が一番わかつてゐる。だからアタシ、夢中になつて眺めてるだけで良い。眺めてるだけで良いニヤ。

でもきつと、この家の人がもし、この厚い窓ガラスを開け放しにしたら…、そうしたらアタシ、きっと好奇心を抑えられない。車に轢かれて死んじゃうってわかつてても、アタシはきっと、外の世界に出てゆくニヤ。アタシの中のアタシを抑えられないよ、きっと。だから氣をつけて、アタシをよく見ていて、じゃないときつとアタシはこの家から居なくなるニヤ。優しくて温かくて馬鹿で面白くて愉快で、アタシに幸せをくれたこの家の人たち。アタシ実は、超大好きだし、凄く感謝してる、ちゃんとしてるよ。でもアタシは、居なくなると思う、外の世界とこの家の境界が無くなつた、その一瞬の隙に。アタシは油断ならない猫ニヤ。だつてアタシは猫。神聖な存在にして、神よりの使いニヤ。高貴にして自然、自然にして高貴

の、ハイソサエティ、ノーブル、詰まる所セレブな存在ニヤ。野良でも飼いでも、ペルシャでもマンチカンでもシャムでもニモでも、アタシらは神聖な存在。崇めるも祭るのも勝手にやれば良いニヤ、それで美味しい思いでできるなら良いと思つニヤ、アタシみたいに捨てられた猫がそれで幸せを得るなら、祭りたてる人間を利用するくらい姑息な手を使ってアリと思つニヤ。猫はそれであつて猫ニヤ、そして、外の世界はそうやつてサバイバルしないと、常に全てを疑つてないと、黒い塊にすぐ啄まれる。甘くないニヤ、猫の世界も人間も。

ぬぐぬぐの日射しがちょっと暑くなつて、アタシはボーッとする頭のままで体を起こす。無駄にアンティークなソファーが、日射しとアタシの体温で温くなつて、アタシはひんやりした場所に向かってソファーの上から飛び降りる。着地したと思ったら、目の前にこの家の長男が偶然、起きてきた。そして目が合つた。アタシは今、寝起きで頭の意識が半分、天空にすっ飛んでる。この男はそれを見抜く。そしてこゝぞとばかりに頭とか頬つぺたとかを手でムシャムシヤ触つてくる。アタシは内心「触んニヤ」つて思いながらも、フワフワする意識の中で少し気持ち良いとも感じるから、しばらくムシヤムシヤ触らせてやるのニヤ。そうしてるうちに結構気持ち良くなつてきて、アタシはそのまま絨毯にコテンシテ横になる。するとこの男は胡坐をかけて、しばらくムシャムシャ頭とか頬つぺたとか顎とか、触つてる。アタシはそのまま、ひんやりした場所に移動するのなんかすつかりどうでも良くなつて、また寝る。

これが猫ニヤ、すなわち神。

我が名はニヤン口。

絶対生物にして時空生命体。我ら汝らの主にして全知全能、宇宙意思の代弁者にして創造主よりの使徒。我ら汝らに問う。摂理の中に在るかと。我ら汝らに問う。在るべきままに在るかと。

三一社

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6861y/>

我が名はニヤンコ

2011年11月20日20時04分発行